

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

2013 年 11 月 5 日、UHB 大学主催で、「熊とは、そして、札幌の市街地に熊が出て来る本当の理由」と言う題で、門崎允昭が約 80 分間、道新ホールで 500 名程の聴衆に講演をした際の全文の最終回(10 回目)を、ここに掲載致します。お読み下されば幸甚です。

[42] 来年以降も人家近くの森林に母から自立した若熊が生じた場合には、このような出沒は今後も毎年起こります。この種の出沒を防ぎたいのであれば、バラ線で目幅 15cm で、高さ 1.5m 程の柵を造れば良い。電気柵は線が草と触れても地下に漏電し用を為しませんし。それを防ぐには保守管理に金が掛かりますから適しません。札幌市は熊対策費として、税金を、2012 年は 1,575 万円、2013 年は概算で約 1,800 万円、民間のエンビジョンという組織に丸投げして、山中に 5 m 四方に有刺鉄線を張り、その囲いのなかに、異臭ふんぷんたる餌を下げ、そこに熊を尾引よせて、有刺鉄線に引っかかった毛を取り、DNA 分析して、個体識別し、札幌圏の熊の生息数を調べると称しやっていますが、この調査手法は手法そのものが餌付けであり、熊の調査では絶対に行ってはならない手法です。こんな調査は熊にも人にも全く役立たない事です。生息数を把握したければ、新雪期に林道を車で走り、熊の足跡を見つけて、その足幅と歩様から、個体を識別し個体数を出せば済むことです。その経費で、バラ線の柵を張った方がよほど、市民にも熊にも役に立つ金の使い方だと言えます。

[43] 二番目の出沒原因は、作物（農作物・牧草）・果樹(果実)・家畜・生ゴミ等を索餌採食するため出て来る事があります。この種の熊は年齢・性別・母子・兄弟と言った要因とは無関係です。時に札幌の簾舞や白川で発生しています。これは、一時的に、最初の被害地に電気柵を設置することで、さらなる被害を防げます。

[44] 三番目は、樹林地から樹林地に道路を横断して移動する際や、樹林地を通過して居る道路を横断する際に付近にある住宅地を通過することがあり、車の運転手や歩行中の人に目撃されることがあります。母から 5 月 6 月に自立した若熊は知恵が未発達で人と遭遇する様な時間帯に出て来て横断する事があるが、それ以外の個体は本能的に人を避けて行動する特性が強く、人と遭遇し難い時間帯に通過する。札幌では定山溪への国道 230 号道路や北ノ沢や盤溪など山間部の道路で発生しています。

[45] 四番目は、その他の原因で熊が市街地に出てくることもある。

- ・稀であるが、発情期の5月6月に発情した雄を避けて雌が逃げ出て来る事がある。
- ・更にこれも稀ではあるが、母子で林地を徘徊中に市街地に近づいてしまい、子熊が興奮して市街地に出てしまい、心配した母熊も子について共に出て来てしまうことがある。ー 2012年に、斜里町の街中に出て来た母子熊がこれに該当します。

[46] 次に、熊の棲む北海道の自然との積極的な係わり方についてお話します

道の前記パンフレットには、熊は危険なもの、恐ろしいものと言う前提で、「熊の糞や足跡、食べ痕を見つけたら、直ぐに引き返しましょう」と書かれて居るが、熊と積極的に共存するという観点から、これは消極的な姿勢と言うべきで、このような姿勢で熊を見る限り、熊との共存は出来得ない。熊は古来（有史以前）から北海道に棲んでいるのであり、熊が居る自然が北海道本来の自然であることを前提に、自己責任の下、積極的な姿勢で熊に対処することを啓発すべきであると提言したい。現に熊が度々出没する地所の住民（道民）は、熊が居て当たり前と言う意識で熊を見ている。この姿勢が熊が棲む北海道の住民の望ましい姿勢と言うべきです。熊の糞・足跡・目撃情報があったからと、自然遊歩道を閉鎖し入域禁止したりすべきではなく、自己責任のもと、「ホイッスルと鉦を持参」し、入域することを啓発すべきである。そうしなければ、いつまでも熊との共存はでき得ません。

[47] 私が「人と熊は共存すべきだとする理由について」お話します。

この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限り、お互いの存在を容認すべきであるとする生物倫理、（これは、生物の一員としての方が、他種生物に為すべき正しき道）に基づく理念によるものです。北海道に何頭熊が居たって良いではありませんか。言うならば、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図る事です。しかし、里に出没する熊の生態を見極めた対応の欠如から、世間を騒がせ、熊を含む野生動物の無益な殺生が、明治の開拓期以降、全く改善されず、今なお続いていることは甚だ遺憾だと言う事です。

[48]最後に、アイヌと熊について、お話します

アイヌは熊をカムイと称し、イオマンテ(イオマンデ)と称する日本語に訳すと、「熊祭り、熊送り」と言う儀礼を行っていましたが、それは、アイヌの自然観・物質観に基づくものなのです。アイヌは動植物など地上の自然物はアイヌの為に天上などに住む神が変装し地上に降誕した姿と見、アイヌが作った用具にも神が宿ると考えました。また自然現象である風雨・雷・地震なども、神の所作行動の結果と考えました。それで、アイヌが得た獲物は獲物を得た後、あるいは用具として利用したものはそれが不要になった後、変装していた神、あるいは宿っていた神を神の国に帰って居ただく儀礼を、広く行っておりました。ですから、熊送りの儀礼もその一つとして、行われていたもので、特別なものではなかったと私は解釈しています。 (丁)